

5) 胆嚢固有筋層内癌 (pm 癌) の臨床病理学的検討

片山 麻子・渡辺 英伸
阿部 実・佐藤 正弘
野田 裕 (新潟大学第一病理)

胆嚢の pm 癌12症例, 微小 ss 浸潤癌29症例を用い, pm 癌は, 早期癌としてよいか, また, 形態学的にどの様な特徴があるか, 検討した。

pm 癌12例には, 静脈侵襲, 神経浸潤, リンパ節転移はなく, リンパ管侵襲が1例に認められ, 予後調査可能であった pm 癌9例は, 全例生存中であった。さらに, pm 癌は, 微小 ss 浸潤癌に比べ, 脈管侵襲, 神経浸潤, リンパ節転移が低く, 5生率も, 有意に良好であった。以上より, pm 癌は早期癌として妥当であろうと考えられた。

また, I型下で固有筋層への浸潤を示している pm 癌では, 固有筋層の引き上げ像を4/5例に認め, 浸潤部直上粘膜部組織型が中～低分化であるものは1/5例であった。以上から, pm 癌の固有筋層への癌浸潤には, 固有筋層の引き上げが, 癌の分化度よりも大きく関与していることが考えられた。

6) ハムスターにおける BOP 誘発実験胆道癌について

一胆石形成食の影響について一

山洞 典正・白井 良夫
黒崎 功・坪野 俊広
伊賀 芳朗・長谷川 滋
塚田 一博・吉田 奎介
武藤 輝一 (新潟大学第一外科)
篠川 主 (南部郷病院外科)
福田 喜一 (町立巻病院外科)

〈目的〉BOP 誘発胆道腫瘍に対する胆石形成食の影響について検討した。〈方法〉7週令雌ハムスターで, I: 対照群 (16匹), II: 20ppm 濃度 BOP (N-Nitrosobis (2-oxopropyl) amine) 飲水群 (9匹), III: II + 胆石形成食負荷群 (5匹) とし, I・II群は市販の固形食で, III群は谷村の胆石形成食で5週間飼食し, その後市販の固形食に戻した。BOP 含量は20週摂取させた。20-21週で屠殺し肝・胆管・胆嚢を病理検索した。〈結果〉II群: 肝に嚢胞腺癌22%, 胆管に異型上皮22%, 胆嚢に異型上皮44%認められた。III群: 肝に嚢胞腺癌40%, 胆管に腺癌20%, 胆嚢に腺癌20%, 異型上皮80%認められた。〈結語〉胆石形成食は BOP 誘発胆道腫瘍発生に関し促進的作用を持つことが示唆された。

7) 胆石に対する体外衝撃波破砕療法の経験

佐藤 攻・平原 浩幸
若桑 隆二・松田由起夫 (長岡赤十字病院)
田島 健三・和田 寛治 (外科)
広瀬 慎一 (同 内科)

1990年8月から10月までの3ヶ月間に経験した胆石に対する体外衝撃波破砕療法 (ESWL) の成績を報告する。機種はシーメンス社製 LITHOSTAR PLUS。対象とした症例は胆嚢結石8例, 胆管結石5例の計13例であったが, このうち胆嚢結石2例, 胆管結石3例は, オーバーテーブルモジュールに内蔵された超音波装置での胆石描出ができない (機械の操作角度の限界) などの理由で ESWL が施行できなかった。実施された8例の効果は, 結石消失1例, 有効 (破砕片が3mm以下) 2例, 効果不十分 (破砕片が3mm以上) 1例, 破砕不能4例 (2cm以上のコ糸石2例を含む) であった。今後胆石治療において, 適応を限定した ESWL は有用な治療法となりうると考えられた。

8) 胆道癌における Expandable Metallic Stent の経験

齊藤 明 (県立新発田病院)
放射線科
関根 輝夫・篠原 敏弘 (同 内科)

胆道癌による閉塞性黄疸症例4例に Gianturco 型 Expandable Metallic Stent を用いた胆汁ドレナージを施行した。全例, 放射線照射を併用した。4例の内訳は, 肝内部胆管癌が1例, 中下部胆管癌が2例, 胆管浸潤を伴う胆嚢癌が1例であり, 全例女性, 平均年齢は74才であった。

一期的には全例で良好なドレナージがえられた。1例のみ, 経過中に再黄疸をきたし PTBD 内瘻に変更した。他の3例は現在あるいは死亡時まで黄疸の再発をみない。4例のステント設置からの無黄疸期間の平均は211日である。患者の QOL および経過観察の容易さより, 本法はきわめて有用な胆汁ドレナージ法であると考えられる。

9) 興味ある経過を示した総胆管狭窄症の1例

太田 宏信・関根 厚雄 (新潟県立吉田病院)
内科
船越 和博 (信楽園病院内科)

症例は78歳男性。平成元年6月黄疸を主訴に当科入院。各種検査および細胞診より慢性膵炎を合併した総胆管癌による閉塞性黄疸と診断した。ERBDにて経過観察し